

Title	異文化間の誤解と外交政策への政治文化の影響。アメリカ合衆国とドイツ
Author(s)	Stephen, Kalberg 森川, 剛光 / 訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.51, 2012.1 : 206-234
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4204
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

異文化間の誤解と外交政策への政治文化の影響。
アメリカ合衆国とドイツ

ステイヴン・コールバーグ

森川 剛光 訳

《解説》

ここに訳出したのはステイヴン・コールバーグ氏の論文“*The Influence of Political Culture Upon Cross-Cultural Misperceptions and Foreign Policy: The United States and Germany*.” (2003) による。

この論文は米独政治文化比較論である。テーゼは両国の政治文化、とりわけ国家の役割と社会における倫理的行動の位置づけの相違が両国間の誤解と対立——外交政策上のそれを含めて——を強化してきたというものである。アメリカでは、古プロテスタンティズム由来のシビック的理想、人格的自由、小さな政府の伝統のため、「倫理的行動は完全に世俗的な政治上の権威と国家から切り離された」。「倫理的行動はアメリカ社会の数え切れない市民団体における政治的経済的アーリーナに幅広く分布し、それはアメリカの政治文化への計り知れない帰結を伴った。《政治的倫理的》理想は繰り返し、時には幅広い仕方、政治的経済的領域

に共通の功利主義的で利益に定位した動機づけに対する挑戦として提示された」。この政治文化は貧富の格差（社会問題）を放置するという弱点をもっているが、「市民のシビック的領域からの全面的な撤退を繰り返し予防する能力」という長所をもっている。これはドイツの政治文化には全くない特徴だという。そして「持続的な道徳的キャンペーンだけが政治的倫理的行動をその中核において回復させ」、「統合的な連帯に不可欠なものである」。別の言葉でまとめれば、米国社会は二〇世紀末に至っても倫理的に統合された社会であるということであり、米国の政治文化は——外交政策も含めて——道徳のチームで自らを理解しているということになる。これはドイツの政治文化——官僚制を伴った社会福祉国家と市民の私的領域への撤退（大きな国家と無力な市民）、ないしは機能的分化という政治文化とは全く異なっている。ここから生じる両国政治についての相互誤解を著者は、「ドイツ流の社会的連帯は市民に力強く、政治的倫理的利害関心に根ざした説明に対抗する思想を注ぎ込むことはほとんどでき」ず、ドイツでは「アメリカ人は、子供っぽく、無邪気で、ナイーブで、偽善的で」あり、一方アメリカでは「ドイツ人はシニカルで疲れ切った《古い欧州人》であり、その活力と理想を失っている」という言説が一般化するという。

この論文は二〇〇三年のイラク戦争開戦前後に書かれたという背景を訳者として指摘したい（その意味でこの邦訳は少々遅すぎた嫌いがある）。二〇〇二年、当時のシュレーダー独首相は再選のために、イラク戦争反対を連邦議会選挙の争点に据えた。これにより、社民党と緑の党の連立与党は過半数確保に成功し、シュレーダー首相は再選された。特に左派陣営の支持者である平和主義者の動員に成功したことは大きかった。しかし、これにより米独関係はきわめて悪化し、メルケル首相就任まで冷え切った関係が続いたのである。シュレーダー首相の「イラク戦争反対」は選挙戦略であることは見え見えでも、当時、少なくとも自分で考える能力のあるドイツ人は、ブッシュ米政権が本気で「自由」と「民主主義」のためにイラクに対

して戦端を開こうとしているとは誰も思わなかった。しかし、アメリカ人以外の世界の誰がブッシュJr.の開戦理由を本気で信じたのだろうか。ラムズフェルド国防長官に「古い欧州」と揶揄されたフランス、ロシアはドイツと並んでイラク攻撃反対に回っていた。当時のイラク・フセイン大統領の権力掌握を援助し、一九七九年のイラン革命後イラクを戦争にたきつけ、イスラム革命に対する防波堤として利用し、また第三世界の数多くの独裁政権を自国の利益のために援助してきたのが米国の外交政策であったことを考えれば、米国の主張が説得力をもたないのはドイツ人でなくとも納得できることである。そしてこのことがアメリカ人の知覚からすっぱり抜け落ちていることは、コールバーグ氏は指摘していないが、米国政治文化の大きな弱点であり、故にこの論文は米国知識人による米国社会の自己記述として読むと現代でも興味深いのではないだろうか。

イラク戦争に関するドイツとアメリカ合衆国の意見の相違は大きなものであった。二〇〇二年の冬の間、この長期間同盟国だった二国間の間に長期的な裂け目が生じ、双方の信頼が完全に失われたと語った観察者は多かった。最近の雪解け開始にもかかわらず、独米関係は変化し、かなりの程度弱体化したということを疑うものはいない。⁽¹⁾この関係が被った打撃は、過去の対立で生じたものより、はるかに深刻なものである。過去の独米対立とは、例えば、東方政策 *Ostpolitik*、中性子爆弾、ソ連のガスパイプライン、ハイテク製品のソ連への輸出、ポーランドの軍政に対する一九八〇年の経済制裁の実施、ドイツにおける一九七〇年代後半の中距離弾道弾の配備、一九八九年の短距離弾道弾の

近代化等々に伴った対立である。

同盟国間の対立の繰り返しは、地政学上の力学、国内政治上の考量、経済上の利益の相違から生じると説明されることがしばしばである。確かに国際的な意見の相違は、少なからずこうした要素に根ざしているが、それだけでは強い因果的説明を提供することはできない。一国民の政治文化の中心的要素が一国の外交政策に影響を与えること——それ故異質な政治文化をもつ国民との対立も時には生み出す——も認められなければならない。この論考はドイツ連邦共和国とアメリカ合衆国との間の比較的最近の論戦に焦点を当てることで、いかにこのような敵対関係が生じるかを示すことを目指す。

最初にドイツとアメリカ合衆国の政治文化が簡潔な歴史的分析により個別に抽出される。その際には、ヴェーバーの洞察、手続きが役に立つ。つまり、それぞれの社会で政治文化の二つの規定的な特徴——つまり支配的な国家観と《政治的倫理的》⁽²⁾行動の位置づけ——がどのようにユニークな輪郭を獲得したかが歴史的に分析される。続いて、この二つの軸からそれぞれの国民の今日の政治文化の特定の位相が流出する仕方が吟味される。更に、その輪郭、固有の長所、弱点、ジレンマが確定される。⁽³⁾ おびただしい数のドイツ人の間のアメリカ合衆国についての予測可能——あるいはパターン化された——誤認と誤解、アメリカ人の間のドイツについてのそれはこの軸に沿った相違から発生し、維持される。更に、繰り返し、かつパターン化された仕方では、この誤認のいくつかのものは独米の外交政策にも影響を与え、それどころか変動する地政学的力学、国内政治上の考慮、経済的利益から生じる非体系的な——ランダムでさえある——国際対立を強化し、構造化する点にまで至るのである。

結論の部分は、政治文化の相違が国際対立をいかに強化し、構造化するかという問題に向けられている。イラク戦争に関するドイツとアメリカ合衆国の間の激しい対立関係は、同盟国間の通常の議論の一例として見られる。それは地政学上の力学、国内政治上の関心、経済的利益に根ざしているが、より激しくなり、政治文化上の相違に影響され、構造

化され、パターン化された誤認を発生させる。イラクに関する議論の適切な説明は、この研究が主張するように、政治文化によって担われた誤認の存在を、それがしばしば散漫なものであっても、認めることを含めなければならない。⁴⁾

文化の深層にある長期的な歴史的諸力

国家観の相違

アメリカ合衆国では創設期から、独特の仕方では国家は定義されてきた。新しい国民の存在理由は憲法、権利章典、政治的自由をその中核においた。建国の父達は、国家は個人の権利と社会の発展を妨げるべきではないと主張した。むしろ自由な討論と意見の開かれた交換を保護することで、その妨げられない展開を保障すべきであるとされた。市民の生活を導き、社会的経済的変化を指導するあらゆる試みをもし社会が放棄すれば、公正でよき社会は進化していくと初期のアメリカ人は確信していた。独立独歩というエートスと個人の逆境に打ち克つ能力への堅固な信頼は幅広く広まっており、特にアメリカ西部の開拓と古典的自由主義、社会ダーウィニズム、ホレーショ・アルジャーの夢が強く受容されるとともに、広まった。⁵⁾ 一九世紀後半の資本主義の急速な成長とそれに続く社会秩序の大規模な崩壊も、アメリカ人に、その《小さな国家》と独立独歩という布置関係を破棄させはしなかった。《ふつうの人》の独立とその健全な判断力と《できる》という楽観的な態度が崇められたのである。

この国家の定義はドイツの国家観と鋭い対照をなしている。資本主義、都市化、そして世俗化は古いゲマインシャフトを破壊し、そして前代未聞の社会的・政治的混乱を引き起こしたとドイツ人は信じた。国家は、社会的統一を支える

十分な権威をもった唯一の制度として、積極的な役割を果たすように期待された。資本主義によって引き起こされた混乱のために——不利益を被っており、同時に潜在的には破壊的であるとされた住民を保護する様々な《保護と福祉》の手段（救恤国家 *Daseinsvorsorgestat*）は一九世紀後半までに政治派閥のいかに問わず、適切でもあり、必要でもあると考えられた。失業・事故・健康の各種保険、年金、課税による富の再分配、そして様々な社会福祉がそれである。国家は《社会的責任 *soziale Verantwortung*》と《社会的公正 *soziale Gerechtigkeit*》の駆動力でなくてはならず、共同体、形成的市場（社会的市場経済 *soziale Marktwirtschaft*）を促進し、大規模な不安定化に対決するために経済を効率的にマネージメントする直接的な役割を果たさねばならない。⁽⁶⁾

この国家観の理念的な相違は、長い影を落とす遺産として、社会変動の数十年を通して濾過され、今日のそれぞれの国民の実践的政策に照らし合わせて吟味されてきたに違いない。それ故、人格的自由と自由な政治的表現はしばしば、ドイツ連邦共和国では、アメリカ合衆国と比較して社会的公正、根本的な社会的連帯、あらゆる市民にとっての程度での生活水準、そして富の公平な分配の追求のために国家の権威を動員することほど中心的ではないものとして知覚された。ドイツ連邦共和国での政治上の議論はしばしば、不公平に機能するとされた資本主義市場の改善へのプログラムに焦点を当てたのに対し、アメリカの議論では人格的自由と個人にあるとされている独立独歩に対する効果の点で国家の権威がよりしばしば評価される。それどころか、独立独歩の観念と現代資本主義の挑戦を乗り越える能力はアメリカ合衆国では国家による社会的責任と社会的公正のエートスの発達を制限した。

政治的倫理的行動の位置——社会的連帯の二つの様相⁽⁷⁾

今日でもアメリカの政治生活の中核には、バプティスト、プレスビテリアン、メソジスト、メノナイト、クウェー

カーといった禁欲的プロテスタント教会とセクトの遺産が残っている。これらの組織では日常生活のあらゆる点での神の命令を厳格に遵守することを信者は深く義務と感じていた。というのは、彼らは自分自身を高貴な使命に参与していると見なしていたからである。つまり神の栄光のために神の王国を地上にも建設するという使命である。確認された《救済された身分》へのあらゆる望みは、今や孤独な信者の手中のみにあるのであるから、崇高な独立独歩が彼らに求められた。神と信者の間の媒介者としての僧侶の助けはもはや役に立たなかった。告解が廃止され、信者の行動は厳密かつ包括的に、教会およびセクトのあらゆるメンバーから監視されたので、倫理的な逸脱は避けられねばならなかった。⁽⁸⁾

それ故、強力なインセンティブが倫理的行動（あるいは少なくともその外見）に与えられるようになった。独立独歩に加えて、他者の扱いについての無条件の普遍主義と公平さが——我々は皆神の子なので、魂を通じて神とつながっており、そしてそれ故謙虚さと敬意をもつて取り扱われねばならず——これもまた誠実な宗教性の認知できる印となった。ヴェーバーによれば、特にプロテスタンティズムのセクトは倫理的価値をそのメンバーに伝達する大きな能力を表しており、そしてそうすることで、特定の形式の行動を作り出す能力をもつ。メンバーの選定を通じた聖餐式への参加の許可の支配がそうするし、その上さらに共同体の自治としての性格もそうするのである。規律の実施は今や素人の手に握られ、より脱中心化され、より権威的ではなくなるが、より徹底的になり、セクト・メンバーを取り込んでいく。この能力のために、セクトは修道院の秩序を再興するとヴェーバーは主張している。⁽⁹⁾

けれども、価値と《選ばれたという資質》はセクトによって更に強烈な仕方で仲介される。メンバーの行動への包括的な監視・訓戒・規律能力の帰結としての単一の社会的力がセクトを一方で特徴づけ、他方でこの力はあらゆる行動を宗教的に意義づけることに基いている。《尊敬すべき・品位をもつた》仕方で行為する能力それ自体が内部における神のエネルギーの証明を提供した——そして神は救済されたものの間でのみ現存するのである。それ故、行動が外的に

も内的にも監視されるようになったので、信者は継続的に正しい仕方で行なうべきではない。というのはどのような失策も、たまたまの、あるいは許しうる躓きというよりも、むしろ《恩寵からの転落》として理解されたであらうからである。そして、ヴェーバーが強調するのは、《純粹な》信者の排他的な組織としてのセクトの本性が与えられると、《悪い性格》のいかなる露見も即座に社会的な排除に導くということである。⁽¹⁰⁾ それ故、セクトにおける必然性、仲間の目に監視され、《自分自身を監視》すること——これは誠実な信者内部における自分の^{メンバー}會員権を行動により絶えずテストすることを通しての選出であり——は絶対的になった。教会の權威主義的な規律とは異なり、ヴェーバーはこの種の倫理的行動の形成の仕方を《人目につかないもの》と見ていた——が、結局より包括的で強烈であった。⁽¹¹⁾「あらゆる経験によれば、自分の仲間のサークルにおいて自分自身を維持する必然性によるものより強力な習性の訓育はない」。

担い手としての禁欲的プロテスタンティズムとともに、一連の倫理的諸価値が政治的・経済的活動の道具的に計算的な類型的關係に浸透し、それを変形させた。《世俗的》⁽¹²⁾宗教的信念は、強力なシビック的^{オリエンテーション}方向づけ、更にはビジネスの^{オリエンテーション}方向づけによって満たされた。連帯を陶冶し、統合する価値普遍主義、公正、誠実さは、この種の教会とセクトが支配的になった地域では、共同体全体にわたる倫理的行動の基準となった。⁽¹³⁾

この種の基準は産業主義と都市が発達し、禁欲的プロテスタンティズムが徐々にアメリカ人に対するその支配力を弱めるとかなり弱まった。けれどもその教会とセクトが影響力をふるった地域では、家族、隣人關係、および市民的団體により二次的に変形・洗練されたとはいえ、この種の統合的な価値が持続的に残っていた。それ故、普遍的正義、公平、社会的信頼、機會の均等という世俗的な理想の形態において、連帯という価値は持続し、《公的理想》と《シビック的倫理》となったのである。別の言葉で言えば、通例、經驗的に悪用・侵害されても、それらは行為規範となり、経済的政治的關係における倫理的行動への希望を絶えず再活性化させ、それ故市民をその達成のために——時には決定的に——行動するように力づける。⁽¹⁴⁾ この統合力をもったシビック的価値は、ずっと弱い現れ方になったとしても今日です

ら見出すことができる。⁽¹⁵⁾

シビック的理想という強力な特徴はある特殊な帰結を含意していた。アメリカ政治文化における人格的自由と政府の限定された任務の強調に補助され、私的領域の関係の中という伝統的な位置を超えた珍しい位置を獲得した。倫理的行動は完全に世俗的な政治上の権威と国家から切り離された。⁽¹⁶⁾別の言葉で言えば、倫理的行動はアメリカ社会の数え切れない市民団体における政治的経済的アーリーナに幅広く分布し、それはアメリカの政治文化への計り知れない帰結を伴った。《政治的倫理的》理想は繰り返し、時には幅広い仕方、政治的経済的領域に共通の功利主義的で利益に定位した動機づけに対する挑戦として提示された。時々、シビック的理想はそれらに浸透し、変化を加え、それ故に、社会的連帯の特殊アメリカ的あり方を確立した。国家と法律は、社会統合の疎遠な二次的三次的機制を構成したにすぎなかった。

政治的倫理的活動はドイツでは別様に位置づけられていた。ルター主義とカトリック主義は、一方で極端な独立独歩のエートス、他方で普遍主義、公正、社会的信頼という価値に染まった個人の禁欲主義を欠いていた。⁽¹⁷⁾それは——この禁欲主義の《現世》志向のために——精力的かつ強烈に信者のルーティン活動に進入し、政治経済的領域の大量の道具的関係に直接直面した。一九世紀の都市化、世俗化、そして近代資本主義の展開に伴い、むしろ準封建的で、特殊主義的で位階制的な信念、習慣、儀礼がこの領域に浸透した。けれども、この要因に対する行為志向は適切には利害計算に基づいた関係を制限せず、近代資本主義の成長とともにますます広まった。それ故、もしこの限定が、特に広範囲な世俗化の光のもとで、⁽¹⁸⁾ある効果的な仕方で生じなければならぬとすれば、強力な国家の全資源が動員されねばならないと信じられた。それによれば、国家と法律は、アメリカ合衆国でそうであるように、教会、セクト、市民的団体よりも社会的信頼、フェアプレイ、《シビック的倫理》の主要な担い手として理解されるようになった。ドイツ国家の倫理的義務は包括的な法体系の構築と執行、法の前の形式的な平等、資本主義経済の管理と制限、一連の社会的平等、社会福

社と一般的な尺度での連帯の執行を含んだ。⁽¹⁹⁾

それ故に、アメリカ合衆国よりもずっと大幅に、政治的倫理的で統合作用をもつ行動はドイツでは国家を主要な参照点としていた。国家をめぐる政治的倫理的行動のこの結晶化に由来する二つの重要な帰結は、その二つともがドイツの事例とアメリカの事例を区別するのだが、この行動はドイツではより焦点を当てられ、政治的領域の正当性は資本主義、世俗主義、都市主義による社会的混乱と不平等の克服に国家が成功したことより緊密に密接に結びつけられるようになった。分裂的な道具的で純粹に功利的な関係と緊張関係にある倫理的理想を先鋭化する幅広い市民的結社が拡散され、拡大された《政治的アーリーナ》がアメリカでは形成されていたのに対し、ドイツでは国家、結局政党がこの領域を形成していた。

独米政治文化の深層に存在し、歴史的に長期にわたる異質性を国家観と政治的倫理的行動の位置づけの分析を通じてここで明らかにしてきた。この議論に基づいたアメリカとドイツの今日の政治文化の異なった弱点、強さ、ジレンマの特徴の探求は、それぞれの政治文化の独自の境界と内容を境界づけるであろう。それに続く節で、多くのパターン化された誤認と誤解の判定も可能にするだろう。最後に、外交政策上の対立も、部分的には政治文化上の相違により引き起こされたかどうかの評価も導くであろう。

今日の政治文化

アメリカの場合——弱点、強さ、ジレンマ

今日のアメリカ合衆国の政治文化をはっきりとした弱点、強さ、ジレンマが特徴づけている。政治的倫理的行動は、一方で統合作用があるシビック的で倫理的な理想と他方では現代の政治経済関係に固有の道具的な計算の間の持続的緊張関係という形式で、アメリカ社会全体にわたり、浸透している。そしてそれ故、国家とその能力は決して緊密に結合されなかったので、包括的な福祉国家も真の意味での混合経済も明確な正統性を獲得することはできなかった。弱い国家と独立独歩という布置関係が市民を都市化と産業化に固有の多元的な破壊作用から防衛することは不可能なので、ほとんどすべての産業国家において想像不可能なほど過酷な社会問題が発達することになった。暴力犯罪、貧困とホームレスの拡大、所得と富の深刻な不公平は周期的に社会的組織自体を脅かす。

けれども、アメリカの政治文化は強さも幾つかを示している。個人の権利、独立独歩⁽²⁰⁾、そして政治的倫理的行動と絡み合った限定的な国家、それは様々な市民団体に係留され、普遍的正義、フェアプレイ、機会均等、社会的信用という公的理想に定位しているが——この風変わりな形態は市民にエネルギーを与え、遍在する市民の生き生きした活動主義、ボランティア主義を維持する。様々な市民団体を通じて、「不公平」な経験的現実と公的理想の間の不一致を判定し、それに作用することを繰り返してきた能力は政党もしくは国家への独占的な定位よりもむしろ、この政治文化の卓越した連帯を意味する⁽²¹⁾。例えば、普遍的な平等の理想と不平等と差別の共通の経験の間にある不整合は、それ自体繰り返

返し、奴隸制度廃止論者、婦人参政権論者、市民権・女性と同性愛者の社会運動のような改革運動に刺激を供給してきた。

それにもかかわらず、このアメリカの政治文化の中心的な構成要素——その広い市民団体に基づいた活動主義と政治的倫理的行動を繰り返し回復する能力⁽²²⁾、そしてそれ故、市民のシビック的領域からの全面的な撤退を繰り返し予防する能力——はその中核である潜在的に危険な要素を制限する。それはドイツの政治文化においては明白に欠けている。公的理想の広い領域とそして、時には、力強い影響と義務的でさえある性格は、その成就に定位した活動は道德的純化のキャンペーンに素早く旋回していくという可能性を含意する。それどころか、禁欲的プロテスタンティズムの世俗化された遺産の持続により、これらすべては活動を道德的共同体の創出に向かわせるのだが、この潜勢力は通常一定の間隔を置いて明白になる。アメリカの政治文化的風景におけるこの特徴の更なる影響力の源が注記されねばならない。一連の公的理想を奉り、独立独歩の個人に大きな自信、熱狂的性格すら与えるこの政治文化の非凡な能力、それらが呼び起こした希望を満たす能力、この能力も（共通のエスニシティ、宗教、あるいは歴史のような）社会的連帯のための他の安定的な基盤が欠けているという事実⁽²³⁾に由来している。ドイツに直接対照させれば、アメリカの政治文化が国家に重要な統合能力を付与するあらゆる首尾一貫した努力を否認することで、この危険を強調する。

ここにアメリカの形態の中心的ジレンマもユニークさもある。持続的な道德的キャンペーンだけが政治的倫理的行動をその中核において回復させ、そしてそれ故、統合的な連帯に不可欠なものであることがわかる。この連帯が分裂的で、政治及び経済的領域の独立独歩の個人の自己利益に従った道具的な利益計算——それはアメリカでは凝集性のある正当なあるいは包括的な社会福祉国家とその多様な法律によって限定されない——を制限する。けれどもそのような十字軍は不寛容の要素を注入し、人格的自由を直接脅かしかねない。そしてこの人格的自由こそアメリカ合衆国で二〇〇年以上もの間貴重なものと見なされてきたのだ。⁽²⁴⁾ 比較的繰り返し行われる道德的キャンペーンは通常相対的に害のない

形式をとる（例えば、人権擁護、不平等、差別、犯罪、飲酒、ドラッグ、汚職、喫煙、ポルノ、売春、大きな政府等に対する反対）。（マッカーシズムのように）《悪に対抗する》より憎しみに燃えた伝道ともなりうる。この十字軍は時には、米国の理想と価値が他の文化にとつても適切だと想定することすらあろう（ベトナム戦争と他の伝道的な対外政策の表明のように、このトピックは後で詳細に扱う²⁵）。政治的倫理的活性化と人格的自由の間のこのデリケートなバランスを維持することはアメリカの政治文化にとつて絶えざる課題であつた。更に、その社会全体に広がり、拡散し、広く価値に基づいた連帯の形式は常に、比較的広範な社会的無秩序を含意するだろう。それにもかかわらず、このバランスにおける緊張の減少は、結局、深刻に破壊的なものとなるであろう。なぜならば、アメリカの活力、ダイナミズムそして開かれた態度という特徴の基礎的源泉が攻撃に曝されることになるからである。このエネルギーと多元主義が、科学的文化的経済的革新を促進し、現状に対する慎重な定期的批判と漸進的な改良、アメリカの様々で多くのマイノリティの同化を促進してきたのである。

ドイツの場合——弱点、強さ、ジレンマ

ドイツの政治文化における特異な国家観と倫理的行動の位置づけも、独特の強さ、弱点、ジレンマを含意している。社会的責任と社会的公正の構成体を支持する超党派の同意が継続しているために、ドイツ国家は高度産業主義に由来する社会問題と戦う正統性をアメリカ政府よりずっと多く所有している。それ故に、国家はかなりの程度の富と所得を課税により再分配し、貧困とホームレスの問題を緩和する包括的な措置を導入し、失業者を再訓練し、家族を児童手当により梃子入れし、授業料無料の大学を援助し、惜しみなく芸術に資金提供し、そして一般的に称号授与を惜しみなく行っている。更に、ドイツ国家と政党が経済運営、労使関係の調整と福祉政策に成功すればするほど、国家と政党がも

つ善意の後光は輝きをますます増していく。

それにもかかわらず、社会問題に対し国家の權威を総動員することを正当化し、国家と主要政党に高い期待をかける、ドイツ連邦共和国の政治文化の能力は、二つのドイツ式の社会的連帯に固有の明白な危険を含意している。第一に、公務員により、国家は時にはその判断の優越性を当然とし、市民を威嚇する傲慢な態度を示す。第二に国家と政党の能力が不適切であると知覚されたときでさえ、それに対する攻撃的な批判とシニシズムも急速に硬直化してしまう。そしてこれは市民の私的領域への撤退へと導く。

この点の脆弱さは、一九九〇年代後半から今日に至るまでもまた続いているが、特に一九八〇年代に明らかになった。この期間に失業率と財政赤字は劇的に増加し、ヘルムート・コールとゲルハルト・シュレーダーの政権は社会保障費を幾分削減した。さらに次に述べるもう一つの要素によつて、失望感と不満が高まった。これは国家不信 *Staatsverdrossenheit* と政党不信 *Parteiverdrossenheit* ともいわれる。都市化と高度資本主義によつて引き起こされた、秩序の複合的な崩壊に向けられた国家の使命は巨大な官僚制の結果としてもたらしていた。社会的不平等に対抗する資源を動員するために力を与えられながら、この巨大な組織は市民の要求から離れ、対応できなくなつていった。そして時には脅かすものにすななつた。社会問題と失業問題は増大し、国家と主要政党は市民の不満の自然発生的な対象となつた。

ここにドイツの形態のユニークさと中心的なジレンマがある。政党と国家に対する深刻な幻滅が繰り返されるにもかかわらず、ドイツ連邦共和国の政治文化において彼らの中心的な地位は挑戦を受けないはずだ。政治的倫理的行動の再活性化と一般的な社会的連帯を供給するそれらの中枢的な役割のために、(そしてそれ故、政治と経済の圈における分裂的な利害計算に直面する) 強力な政党と高度の社会福祉国家は不可欠にとどまる。

この記述は、手短ではあるが、二つの中心的な軸に注意を払っている。即ち国家観と政治的倫理的行動の位置であ

る。これによつて一方で、ドイツとアメリカ合衆国の政治文化における主要特徴を孤立化して取り出すことが可能になり、他方で、その独特の強さ、弱点、ジレンマを区別することができるようになる。更に、このように焦点を当てることで、この論考の中心的課題の一つに達成することの一助となる。固有の歴史的発展の承認と国民間の比較に注意を払うことによつて、この二つの政治文化の相違している主なあり方をはつきりと定義することである。それどころか、独米間にある一連の一般的な誤認と誤解はこの異質性から生じている。独米外交政策上の対立を通常形成し、パターン化さえする政治文化が作用する場である議論の仕方に明示的に取り組む前に、それらは手短に吟味されねばならない。

独米のパターン化された誤認と誤解について

この研究は独米の異質な政治的倫理的活動の位置づけと異なった国家観をはつきりさせることを試み、それによつてこれらの政治文化のあり方がユニークであるとされるあり方の幾つかを明らかにすることを容易にする。《弱い国家》、独立独歩の個人主義、多くの市民団体を通じて社会全体に拡散している政治的倫理的行動の位置づけ及び道德的純化のキャンペーンを生む制度化された傾向、それどころか不寛容と個人の自由を脅かしさえするものがアメリカの布置関係を定義する。理想としてのシビック的価値の幅広く様々な組織への浸透により特徴づけられる社会的連帯の独特の様相はこの政治文化を特徴づける。

ドイツ連邦共和国の政治文化はかなり異なっている。国家にアメリカ合衆国よりずっと広い領域を包括する正統性を与えることで、資本主義、世俗主義、都市化に固有の社会問題に大規模に対決する能力が確認される。政治的倫理的行動がより密接に国家と政党に結合することで、社会的連帯が更に洗練される。それにもかかわらず、このドイツの政治文化の特徴は今日でも、政治的幻滅の繰り返しへと向かう説明のつかない傾向を確立する。その一つは、折に触れて、

市民の政治参加からの撤退へと導くことになるものである。アメリカの布置連関は、一方では国家と緩やかにリンクした公的倫理とシビック的理想の長期にわたる生存能力のおかげで、他方では、高度に発達した独立独歩の伝統によって、市民に多様な政治活動の幻滅に対する抗体を植え付け、市民を脅かす国家の能力を最小化する。それにもかかわらず、同じ力学が国家の社会問題に対する正統な權威を制限する。

ドイツの政治文化の《アメリカ化》が進行し、徐々にこれらの差異の幾つかは改善されているように見えるが、この軸に沿った重要な差異は残っている。本質的な相違の領野の幾つかが、パターン化された大西洋を挟んだ誤解の強い潜在力を定式化する。地政学的、国内の、そして経済上の利害が周期的にこの潜在力を活性化する。それどころか、同盟国間の通常の対立も、この深刻で持続的な緊張関係にある程度まで変形されてしまうようだ。ここでは二、三のスケッチのみが可能である。

独米がしばしば、国家理解と独立独歩の示差的な理解の承認に失敗するので、非「コンテクスト的な誤表象へと導く。それ故、アメリカ福祉国家が単にヨーロッパのその発展途上版と理解されるという、広く広まった見解はドイツ連邦共和国で持続してきた（むしろ欧州モデルの発展を排除し、敵対視さえする政治文化に深く根ざしているのである）⁽²⁷⁾。同様に、ドイツ福祉国家のアメリカ人のイメージは、文化的歴史的諸力の固有の布置関係を反映している。ドイツ連邦共和国というマンモスのような国家は人格的自由への脅威を示しているに違いない。アメリカ人がこの《強い国家》を不必要で危険なものとして知覚するのに対し、ドイツ人はアメリカ人は素朴にも個人の独立独歩を誇張し、社会的混沌を引き起こす資本主義の能力を過小評価していると信じている。けれども、この見解はアメリカの宗教的伝統を無視している。それは《現世支配》の独立独歩を崇拜し、資本主義に反対する敵対性を最小化したのである⁽²⁸⁾。

米国政治文化に対するドイツ人のアンビバレンスは積年の一般的な信仰によって強調される。この変動はアメリカ合衆国における共同体形成的市場モデル「社会的市場経済」と社会的福祉国家一般の未発展的性格を承知することに基

づいており、アメリカの社会はアトム化され、つながりを失った《たたき上げの個人》、それはいかなる本質的な社会的結合も欠いている、《大衆社会》として正確に記述されるという信仰である。⁽²⁹⁾ それにもかかわらず、この結論は、政治的倫理的行動の位置づけのドイツ人による理解に当たって不当な要求をたてていること——国家と政党に關してますそのように思えてくるのだが——と連帯のユニークなアメリカの様式を把握し損なうことから生じている。政治的倫理的行動は多数の市民団体が存在する統合的な公共圏に広く分散している。この種の社会統合がアメリカ人の独立独歩、《英雄的個人主義》、自己中心主義^{エゴセントリズム}を抑制してきた仕方の多くは、ドイツ人がアメリカ合衆国を知覚する際にはほとんど知覚されない。そしてそれは別種の社会的連帯に基づいているのだ。⁽³⁰⁾ それどころかアメリカ合衆国におけるシビック的圏の中心性も、禁欲的プロテスタンティズムの遺産の諸相も、強度の社会的画一性の圧力を導いてきた。⁽³¹⁾

独特の国家観と政治的倫理的行動の理解は更なる誤解を導いてきた。政治行動を正当化するためのアメリカ人によるシビック的価値と理想への繰り返しされる訴えは、ドイツでは腹黒く、偽善的であるとさえ幅広く理解されてきた。というのは事実上の動機は——共同体形成的市場「社会的市場経済」のエートスや強力な福祉国家を欠いた自由放任で、野放しの資本主義経済において——経済的で政治的な動機であると想定されてきたのである。それにもかかわらず、この説明は部分的にはドイツ政治文化における市民団体に基づいた理想の未発展を反映している。これらはすべて、もし強力であれば、経済的政治的利害のみに焦点を当てる説明様式に対する障害を作り出す。逆にドイツ人が政党外の公共圏の行動の正当化の主要な基盤として経済的政治的利害を理解する傾向があることは、アメリカ合衆国ではそのような利害関心はシビック的理想を欠いていることは明白なので、計算的で冷笑的なものとして——ドイツ社会における真の社会的連帯の欠如の証拠と見なされる。しかしながら、この結論はアメリカ人が、政治的倫理的行動と社会的連帯が一般的にドイツでは社会的市場経済と社会的福祉国家の多重の法的規制によつて洗練されているその仕方を認めたがらない——あるいは自分たち自身の出発点に照らして知覚することができないということを明らかにする。

それぞれの自国の政治文化において広く受け入れられている想定が国境を越えると、ずっと可視的になってくる。アメリカ人がウォーターゲート事件やモニカ・ルインスキー事件を公的信用を巻き込んだ深刻で許し難い裏切りと理解したのに対し、ドイツ人は（全く困惑しなかったとはいえ）これらの事件を主として野党の政治的利害関心から説明し、アメリカ人の説明を素朴なものとして批判した。ドイツのメディアは、アメリカ合衆国における政党の果たす役割がより小さいことを認め、選挙を有権者の経済的利害関心の点からのみ通例説明する。あるいは候補者の戦略的計算、そしてシビック的理想の果たす役割をなおざりにしている。他方、アメリカのメディアは一般的にドイツの選挙において政党と強力な社会的福祉国家の正の吸引力の果たすはるかに重要な役割を理解しないことを一般的に証明してきた。

恣意的などころかこのようなパターン化された誤解、誤認、敵対は独米政治文化のはつきりとした異質性を例証する。そしてそれらは歴史、伝統、価値に深く根ざしているのも、それらは——外交政策の領域に浸透するような幅広い——帰結をもつ。今や示されうるように、国際的な誤解と不同意は変動する地政学的諸力、国内政治上の考慮、経済的利害関心のみから生じるのではなく、政治文化に根ざした誤認からも生じるのである。まさに政治文化が独米間の対立で因果的役割をどのように果たすか、それどころか時には政治文化なしではランダムに変動する緊張を強化し、構造化するの、次節ではここに注意を払おう。

外交政策上の軋轢——政治文化の役割

《それがなされなければならないのであれば、それはなされうる》

プロテスタント・ニューイングランド・カレッジのチャペルに掲示されている格率

自国の先入観を押しつけることは、しばしば外交政策上のアリーナで独米間の誤解を引き起こしてきた。緊密な同盟関係は否定できず、《独米》友好関係を認識することが繰り返し宣告され、《大西洋同盟の安定性》が告げられたにもかかわらず、過去三〇年間にわたって繰り返し、差異は明らかになってきた。政治文化上の異質さは、この不一致の因果的原因の一つとして、認識されることはまれであった。⁽³²⁾

アメリカ式の社会的連帯は——これは禁欲的プロテスタンティズムの持続する遺産に負っており、政治的倫理的行動を広範で数え切れないほどの市民的団体の中に位置づけているのだが——理想主義的な道德キャンペーンを誕生させた。この種の社会運動の理想は、しばしばルーティン化すらされ、妥協されるとはいえ、アメリカ社会の髓に深くしみ込んでいるので、国内、時には（これもしばしばルーティン化されて、妥協されるとはいえ）外交政策とも緊密に結びついている。けれども、ドイツにおいては、広まった不信と懷疑主義が——それは政治的倫理的行動を国家とその多様な社会福祉機能と緊密に結びつけた政治文化に根ざしているのだが——道德的純化の運動を抑える。あらゆる理想主義的な宣言に対する深い懷疑の念（それは一八四八年の革命の失敗、ビスマルクの帝国議會の操作、ワイマール共和国の失敗、国民社会主義の權威主義のような遠い出来事に根ざしている）がドイツ人をアメリカ合衆国におけるような活動

を、腹黒く偽善的で、国内の政治的観衆を操作することのみを狙ったスタンドライとして、拒絶してしまうように傾向づける。独連邦議会の独軍コソボ派遣決定後でさえ、ドイツの政治文化は伝道的理想主義のあらゆる要素を拒否し続けている⁽³³⁾。それに対してドイツにおける支配的な外交政策の方向づけは国内利害、国際利害、経済的利害⁽³⁴⁾に向けられており、アメリカ合衆国でも一般に倫理的次元が欠如したものであるとして知覚され、それ故に古くかつ新しい信用を失った伝統の非正統的な表明と受け取られるのである。即ち現実政治 *Realpolitik* の伝統である。

アメリカ合衆国においてシビック的理想が多数の団体に基づいていることと道徳的純化のキャンペーンに向かう傾向は、経済的政治的行動をもつばら経済的政治的利害からのみ説明しようというパラダイムが広く拡散することを結果として押しとどめることに役立つ。ドイツ連邦共和国では——そこでは包括的な社会福祉国家と凝集力のある政党に——政治的倫理的行動が異なつて位置づけられているので、政治的経済的利害関心から政治的経済的行動を説明するパラダイムを、米国におけるように、押しとどめることができない⁽³⁵⁾。それ故に、ドイツ流の社会的連帯は市民に力強く、政治的倫理的利害関心に根ざした説明に対抗する思想を注ぎ込むことはほとんどできない。例えば《世界覇権への構想》、《石油利権への渴望》のような。それ故にこの対照はもつと鮮明になつてくる。

アメリカ合衆国の政治文化に伝道的理想主義と道徳的純化の要素がかなりの程度存在しており、ドイツにはそれが欠如しているので、両国間に通例繰り返し生じる緊張の決定的原因と見なされなければならない。注目すべきことは、禁欲的プロテスタントの信念は——神の王国を地上に建設するために悪は寛容をもつて対処してはならず、撲滅されねばならないとする⁽³⁶⁾——過去二〇〇年間の大規模な構造的変化を生き延びたように見える。今や世俗化され、弱体化した形式で現れ、主に保守的グループでより生き生きした形式に位置づけられているとしても。それは特に人々に、彼らの目に、悪と対決することが⁽³⁷⁾《できる》というエネルギーで樂觀的な態度を植え付ける能力を未だ保持している。アメリカの外交政策の背後の複雑な動機の形態において主要なものからはほど遠くても、ただ伝道的理想主義はこの政策の

形成の背後にある主要な影響の解明からは排除されてはならない。

ここで略述した分析は、一国のユニークな政治文化の国際的知覚と外交政策への衝撃をはっきりと承認することに根ざし、米軍の将校による《石油が問題ではない》というあらゆる宣言へのドイツ国内における不信の目に対する説明を提供する。それどころか、時にはアメリカの伝道的理想主義は、これまで主として、地政学的、国内的、経済上の利害に根ざしている国際対立に浸透し、敵愾心はこの過程でかなりの程度強化され、パターン化される——道徳的純化の要素がしばしば強調されるという理由のみから、その通常の国際的な論調も傲慢と独善として知覚され、想定されるならば。このパターン化が生じれば、その後続く議論は《道徳》の線上に沿って構造化されることになるだろう。このような仕方では悪化すると、対立は繰り返され、構造化された道徳的義憤とそのやり返しの形態をとる。

この悪循環の帰結ははつきりとしている。即ち、外交問題において独米はしばしばお互いに語りかけ損なっているのだ。大声で話しかけても双方が相手方の議論を理解できないでいる。異なった政治文化に由来する誤解は時には利害関心に基づいた議論に浸透し、議論が動機のレベルへと退化することが支配的となる。《イラクに民主制を樹立》し、《イラクの人民を解放する》というアメリカの目標はドイツではほとんど一般的に懐疑の念で迎えられ、《真の動機》の探索が行われた。古く使い古されたステレオタイプが速やかに表面化する。彼らの《高貴な理想》をもつて、アメリカ人は、子供っぽく、無邪気で、ナイーブで、偽善的である、と。ドイツ人はシニカルで疲れ切った《古い欧州人》であり、その活力と理想を失っているのだ、と。

この論文で分節化してきた米独政治文化の中心的な特徴は、地政学的力学、国内政治上の考慮、経済的利害関心という慣れ親しんだ説明諸力の一覧は、この両国間の通例の外交政策上の対立の背後にある主要な因果的要因の一覧表を作るには、必要ではあるが、十分ではないということである。

ここで政治文化として言及された、文脈上と背景上の形態は認められなければならない。この概念は、長期的な諸

力も含むが、一国の政治文化上の風景において、深層にある特徴を明らかにする。同盟国間での通例で長期的な対立は、(1) 地政学上であろうと、国内政治上であろうと、経済的なものであらうと利害が対立するならばいつであれ生じてきたし、(2) 異質な政治文化の中心の特徴と作用し、それを明白にし、そしてその文化は(3) 利害に基づいた衝突に以前はなかった強烈さを注入する。この対立は、固有の歴史的発展とユニークな形態にそれぞれの国民の政治文化が深く根ざしているので、利害の移り変わりに基づく対立よりもパターン化され、自己保存された形式であると想定することはずっとありそうである。別の言葉で言えば、主に利害に根ざした対立関係は、システムティックな仕方は見られずに、その激しさは大きくなったり小さくなったり移り変わるのに対し、国民政治文化の中心的要素を呼び起こす対立は、固有の価値、伝統、アイデンティティの觀念から構成されているので、よりしばしば激しくなり、パターン化され、自律的になる。それ故、同盟国の政治文化が傾向的に継続的に相違するこのケースでは、ドイツとアメリカの場合のように、利害に基づいた対立が政治文化に基づいた敵意に巻き込まれないように格別の注意が維持されなければならない。

このケーススタディは、政治文化という変数が、同盟国間の繰り返し生じる対立に焦点を当てる探求では承認されねばならないということを証明しようとしてきた。一つのレベルでは、国際紛争分析への歴史と文化の再編入が要求される。もう一つのレベルでは、独米の政治文化上のかんりの異質性は、それぞれの歴史に深く根ざしているので、ドイツの《アメリカ化》が更に進行したとしても、本質的な相違が徐々に死滅していくことを妨げていることを結論する。未来における周期的な対立の可能性を予告するものである。

原注

- (1) John Vinocur, "German Official Says Europe Must Be U.S. Friend, Not Rival," *New York Times*, 18 July 2003.
- (2) この分析過程で明らかになるように、『政治的』という述語は一般より広い意味で用いられている。
- (3) 文化間比較は常にデリケートな、価値判断になりがちな課題である。この研究ではそれぞれの政治文化を賞賛することも非難することも避けるように努めている。最初に強調しなければならないことはまた、比較の有効性は記述とここで提案された理念型の比較のパースペクティブに限って主張されるということである。有効な比較の定式化がそれぞれの政治文化の特定の構成要素の分析よりも優先される目標である。それ故、この研究は高い一般性のレベルにとどまり、ドイツあるいはアメリカの政治文化の限定された相の探求を目指したケーススタディとして受け入れられるよりも、高次の一般性にとどまっている。そのようなケーススタディは以下の言明の多くには異議を必ず唱えるであろうが——それはまた比較パースペクティブにおいて厳密なものとして擁護もされよう。
- (4) それ故、この研究は独米の相違と緊張を取り扱った幾つかの初期の研究の補足をなす。以下の文献を見よ。Kalberg, "The Origin and Expansion of *Kulturpessimismus*. The Relationship between Public and Private Spheres in Early Twentieth Century Germany," *Sociological Theory* 5 (1987a): 150–164; "West German and American Interaction Forms," *Theory, Culture and Society* 4 (1987b): 603–18; "The Hidden Link between Internal Political Culture and Cross-national Perceptions: Divergent Images of the Soviet Union in the United States and the Federal Republic of Germany," *Theory, Culture and Society* 8 (1991): 31–56; "Culture and the Locus of Work in Contemporary Western Germany: A Weberian Configurational Analysis," *Theory of Culture*, Richard Münch and Neil J. Smelser, eds. (Berkeley, 1992), 324–65; "The Modern World as a Monolithic Iron Cage? Utilizing Max Weber to Define the Internal Dynamics of American Political Culture Today," *Max Weber Studies* 1 (2001): 178–194.

- (5) Kalberg, 1991, 39–42. を見よ。
- (6) Kalberg, 1987a を見よ。
- (7) 最終節同様にこの説の分析は手短な外観を与えるにすぎない。それは特別にマックス・ヴェーバーによる幾つかの研究に特に負っている。“Churches’ and ‘Sects’ in North America: An Ecclesiastical Socio-Political Sketch” (translated by Colin Loader), *Sociological Theory* 3 (1985): 7–13; *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism* (translated by Stephen Kalberg) (Los Angeles, 2002a); “The Protestant Sects and the Spirit of Capitalism” (translated by H.H. Gerth), *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism* (2002b), 127–48; Kalberg, “Tocqueville and Weber on the Sociological Origins of Citizenship: The Political Culture of American Democracy,” *Citizenship Studies* 1 (1997): 199–222; 2001: “Should the ‘Dynamic Autonomy’ of Ideas Matter to Sociologists? Max Weber on the Origin of Other-Worldly Salvation Religions and the Constitution of the Groups in American Society Today,” *Journal of Classical Sociology* 1 (2001): 291–328; at 310–314; “Introduction to the *Protestant Ethic*,” *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, xi–lxxvi.
- (8) Weber, 2002a, 59–60; 2002b, 145–47; 1985, 10 を見よ。
- (9) Weber 2002b, 141–45.
- (10) Weber 2000b, 145; *Economy and Society*, Guenther Roth and Claus Wittich, eds. (New York, 1968), 1206.
- (11) Weber, 2002b, 146; 1968, 1206.
- (12) ヴェーバーはこの述語を(修道院ではなく)世界全体を、誠実な献身が日常活動によつて証明されるべき場としてとらえる宗教的信仰を示すのに用いている。
- (13) Weber, 2002b; 1985; 1968, 1205–6.
- (14) この理想は、常に支持されたわけではなく、——それどころかまれでさえあったが——ヴェーバーにとっては自明であったけれども、ある事情に促進されれば、それらは行動を導くことができるし、実際に導く。それ故、それらは社会学の概念を扱った章からは抹消されてはならなかった。例えば、“Religious Rejections of the World,” *From Max Weber*, H.H. Gerth and C.Wright Mills, eds. and translators (New York, 1946a), 323–59; at 324; “The Social Psychology of the World Religions,” *From Max Weber* (New York: 1946b), 267–301; at 280. を見よ。

- (15) 《ビジネス倫理》と《シビック的責任》の両方としてそれらが強化されることは、コミュニティアンのアジェンダの中心となつてゐる。Antai Etzioni, *The New Golden Rule* (New York, 1997); ed., *The Essential Communitarian Reader* (New York, 1998); Robert D. Putnam, *Bowling Alone* (New York, 2000); Philip Selznick, *The Moral Commonwealth* (Berkeley, 1992) を見よ。コメントリーには John A. Hall and Charles Lindholm, *Is America Breaking Apart?* (Princeton, 1999) を見よ。
- (16) Weber, 1985, 10-11 を見よ。
- (17) Weber, 2002a, 44-46, 58; Wolfgang Mommsen, "Die Vereinigten Staaten von Amerika," *Max Weber: Gesellschaft, Politik und Geschichte*, (Frankfurt, 1974), 72-96; at 81-84 を見よ。
- (18) 今日もそうあるように、一九世紀のヨーロッパはアメリカよりもずっと世俗化が進んでいた。
- (19) この意味でドイツ国家の法規はドイツ・ロマン主義の普遍主義と包摂という理想の担い手として理解されねばならない。これらの理想が社会的に、セクトと教会よりも国家に位置づけられるようになったことは、これから記すようにドイツ政治文化の形成にずっと射程の長い効果をもつてであらう。
- (20) アメリカ個人主義のピューリタニズムにおける起源と一八世紀、一九世紀における様々な引き続く発展を通じた洗練化の分析は Kalberg, 1991, 39-42; "Cultural Foundations of Modern Citizenship," *Citizenship and Social Theory*, Bryan S. Turner, ed. (London, 1993), 91-114; at 104-7 を見よ。
- (21) この要因は米国選挙の投票率の伝統的な低さの説明によりしばしば用いられる。
- (22) 勿論、アメリカ人が素早く市民団体を形成する能力はトックヴィル以来言及されてきた。 *Democracy in America* (New York, 1945), 114-27 を見よ。けれども明らかにトックヴィルの分析はこれらの集団形成の政治的倫理的性格の承認が欠如している。むしろ彼はそれを利益団体形成と見ている (123-27 を見よ)。その起源についての彼の分析には、価値に基づいたプロテスタント・セクトの遺産へのあらゆる言及が落ちているのだが、商業的利害関心の役割と社会的平等主義が強調されてゐる。Kalberg, 1997 を見よ。
- (23) S.M. Lipset, *Political Man* (New York, 1963) を見よ。
- (24) 個人の権利と画一主義の間にあるアメリカ社会における中心的な緊張は深く、かつ大規模な影響力をもつ。Kalberg, 1997 を見よ。

- (25) Kalberg, 1991; Richard Hofstadter, *The Paranoid Style in American Politics and Other Essays* (New York, 1967) を見よ。
- (26) かつてのドイツでは、国家にかけられた高度の期待とそれに引き続いて知覚された非効率性の力学が、一方で周期的に私生活への撤退へと導き、他方では左右過激派運動へと導いた。Fritz Stern, *The Politics of Cultural Despair* (New York, 1964); Karl Mannheim, *Konservatismus: Ein Beitrag zur Soziologie des Wissens*, David Kettler, Volker Meja and Nico Stehr, eds. (Frankfurt, 1984); Ernst Meyer, *Rede zur Gedächtnisfeier des Stiflers der Berliner Universität König Friedrich Wilhelm III* (Berlin, 1920); Wolfgang Mommsen; George Mosse, *The Crisis of German Ideology* (New York, 1964); Terrance Hamerow, *Restoration, Revolution, Reaction* (Princeton, 1958); Kalberg, 1987a を見よ。けれども、一般的により高度の市民的活動主義は、一九七〇年代・一九八〇年代まで、この不満足という逃げ道に対抗する効果的な障害物となってきた。独米の社会科学者がともに同意する点ではあるが、ドイツ連邦共和国は、とりわけ過去三〇年間かけて、多元的な政治に志向する中間団体を（それはほとんど直接的には政治と関わるものないハイキングクラブ、合唱団、チェスクラブ等に対立するものである。後者はドイツの土壌ではすでに数世紀にわたって存在している）国家と個々の個人の間に作り上げてきた。こういった政治的中間団体をトックヴィルは安定的な民主制には不可欠なものとしていた。古い《受動的な市民層》はもっぱら国家と政党に定位する政治活動の伝統的定義同様にドイツでは広範に消えつつある。Max Kaase, et al., *Politisches System* (Opladen, 1996); David P. Conradt, "Changing German Political Culture," *The Civic Culture Revisited*, Gabriel A. Almond and Sidney Verba, eds. (Boston, 1980), 212-72; Dirk Berg-Schlosser and Jakob Schissler, eds., *Politische Kultur in Deutschland* (Opladen, 1987) を見よ。ドイツの政治文化では一つの変容が生じつつある。この発展のために憂鬱さを伴う幻滅と私生活への撤退は深刻なものではなくなってきた。既成政党、連邦官僚、エリート層が市民の要求から乖離し、反応が鈍いと知覚された時は今やいつでも、市民参加は休止状態になったり、左右の過激派に向かうよりも、今やより強烈に地方政治団体へとチャネルを向ける。アメリカ合衆国でそうであるように、長期の宗教的影響というよりも、むしろ経済的構造の変動によって引き起こされたとはいえ、この両国での市民参加の割合は地方組織のレベルで収斂しつつある。
- (27) この見解は、アメリカ福祉国家の限定的な本性を、強力で豊かなエリートの隠れた利害関心として特に非文化的に説明するように、左派において際だっているように思われる。
- (28) 独立独歩という観念は、ある政治文化内部においては、（米国のように）封建的遺産が全く存在しなかったところか、完全

に除去されてしまったところでのみある程度の正統性を獲得するように思われる。けれども、これのみが負の先行条件であろう。《正》の要因もまた現れるに違いないし、社会学的に重要なウェイトを獲得するに違いない。特に重要なのは（この役割を果たすのが禁欲的プロテスタンティズムであらうが他の諸力であらうが）、静的で閉じた、そしてそれ故抑圧的な因習に基づいた位階制度と戦い、社会的平等主義とダイナミズムを導入する能力である。そのような正統化の文脈なしでは、独立独歩は非現実的なものと見えるだろうし、その陶冶を求めるあらゆる呼びかけは馬の耳に念仏であろう。ドイツにおけるより若い世代の間で独立独歩がますます見られるようになってきているということは、それ自体社会的平等主義の成長の証明である。

(29)

米国についてのこの見解が存在し続けているのは注目すべきことである。ほぼ一〇〇年前ヴェーバーはドイツで広く広まったこの偏見に反論していた。彼は、アメリカの民主制は、あらゆる種類の市民団体を生じせしめる広範囲の傾向のおかげで、つながりを失い、アトム化した個人の《砂山》と見ることはできないことを強調した。「過去、そしてつい最近に至るまで、特にアメリカ民主制は個人の無定型な砂山をなしているのではなく、厳密に排他的だが自発的な結社のやかましい複合体であることが正確な特徴づけであらう」(2002b, 135; 強調は原文。133-37を見よ)。それに続いて「誰であれ《民主制》を、我々のロマン主義的思想家がやりたがるように、原子にまですり下ろした人間の固まりと見るものは根本的に誤っている。少なくともアメリカの民主制に関する限りは」(1985, 10; 7-11を見よ。1968, 1206-9)。

(30)

ヴェーバーはアメリカの個人主義は根本的に集団内部に位置づけられていること——あるいは少なくとも集団によつて骨抜きにはされていないことを見ている。ドイツ人の間での含意された想定、即ち米国の個人は、ひとたび集団の中に入ると自分で定義した目標に関して決定する能力を失うという想定を反駁している。それどころか、アメリカ人が集団の内部でさえも《自分自身を保持する》能力をもつてすることに注意を向けている。この見方を定式化するに当たり、彼は再び禁欲的プロテスタンティズムの遺産に言及している(1985, 11-12)。他方、ドイツ・ロマン主義のおかげで、ドイツの個人主義はその根を完全に私化された関係(家族と友愛)にもつている。それ故、公的領域における集団形成においては、とヴェーバーは議論するのだが、集団に神聖なオーラを帰する一貫した傾向のために(1985, 10-11; 以下を見よ)、ドイツの個人主義はその忍耐を失う傾向があり、弱められ、分解すらしてしまう傾向があるのだ。この気質はドイツのロマン主義とルター主義に由来する。ヴェーバーが更に論ずるところによれば、ドイツ人は彼ら自身の個人主義の理解をアメリカ

カの社会に押しつける傾向があり、そのことによってその中心的特徴の一つを根本的に誤解してしまう。例えば、「アメリカ合衆国における」社会組織は、《感情的な》必要に基づいているのでもないし、《感情的価値》を満たそうともしない。むしろ、各員は集団の一部となりながらも、自分自身を維持しようとしてゐる。この故に、ドイツ人が共同感覚の陶冶に不可欠と信ずる性質、即ち農夫の間に典型的に見られる素朴で気楽な適応性は欠けているのである。サッカーチームであろうと政党であろうと、「アメリカ合衆国における」集団での社会化のさめた、事実在即した性格は個人が集団の目的活動へと正確に秩序づける補助をする。けれどもこの参加は、決して個人が彼自身を保持する規制に継続的に注意を払う、必要性を軽く見ることを意味しない。その反対に、集団の内部で自分を《証す》というこの任務は、彼らがグループの中にあり、友人の中にいるまさにその時に人々に明らかになるのだ。この理由で個人が属する社会組織は決して彼らにとつて何か《有機的》なものにはならない。つまり、「ドイツにおけるような」神秘的で個人を超越し、その全存在を包括するような本質的な全体性にはならない。そうではなく、集団形成は、よりずっと継続的に——それぞれの参加者に全く自覚的に——メンバー自身の特定の物質的あるいは理念的目標を追求するためのメカニズムにとどまるのである」(1985, 11; Mommsen, 81-84を見よ)。

(31) Weber 2002b, 141-47; 1985, 7-9を見よ。トックヴィルは後者のみを見、アメリカ合衆国の民主制にとつての恐るべき《多数派の専制》の危険について語った。アメリカ社会における個人主義と画一主義の間の緊張を無視することはトックヴィルの研究の中心的な弱点をなしている。この緊張をヴェーバーははつきりと見ている。彼にとつて、禁欲的プロテスタンティズムが、個人主義と画一主義の双方の遺産を残したのだ。Kalberg, 1997; 2001, 310-14.を見よ。

(32) この点でソ連邦がドイツ連邦共和国とアメリカ合衆国で異なつて知覚されるという私の研究 (1991) を見よ。

(33) 伝道的理想主義は、《ナショナルなアイデンティティ》の図式と密接に絡み合っている。他国民に対して実行される道徳的キャンペーンの先行条件は《壊れていない》あるいは疑問視されず、自信をもった国民感覚である。自己自身への誇りに支えられて、国民は躊躇することなく、自己自身の価値と習慣の妥当性を他国民に向かって主張することにやぶさかではないのだ。このような強力な愛国心は、ベトナム戦争の混乱とその敗北にもかかわらず、今日までアメリカ合衆国を特徴づけている。ウッドロー・ウィルソンの《十項目》と人権憲章のキャンペーンはアメリカ合衆国の理想を普遍的に宣言することの意欲、そしてそれらをアメリカ外交政策の構成要素として定義することの意欲を例証する。無数の文献で議論されて

いるように、ドイツはこのスペクトルムの正反対に立っている。例えば、Martin and Sylvia Greiffenhagen, *Ein schwieriges Vaterland* (Munich, 1979); Jürgen Habermas, *Die neue Unübersichtlichkeit* (Frankfurt 1985), 141–66; Bernhard Wilms, *Die deutsche Nation* (Cologne, 1982); Helga Pross, *Was ist heute Deutsch? Wertorientierung in der Bundesrepublik* (Hamburg, 1982) を見よ。《壊れた》ナショナル・アイデンティティは今日に至るまで、自分に対する疑問というとりをドイツ的価値を外部に課すというまさにその考えに投げかけている。この図式——一国民が無傷で《ノーマルな》アイデンティティをもつかどうか、もしもつならば、国外に向けた道徳的純化のキャンペーンにエネルギーが注がれる様相——はここで行われる議論の延長で探求されるであろう。Kalberg, 1991, 37–39. を見よ。

(34) 《ゲンシャール主義》は最も純粋なドイツ連邦共和国の例を代表している。

(35) これが、私の見方では一九〇六年の著名な神学者であるアドルフ・フォン・ハルナックに宛てられた手紙でのヴェーバーの意見の参照点であった。彼は、ルター主義がドイツの政治文化に高度に否定的な影響を与えたと論ずる。「ルターは誰よりも優れております。が、ルター主義の歴史的現象形態は、私にとつて忌むべき最大のものだということを否定しようとは思いません。将来のあるべき姿としてあなたが期待されるルター主義の理念的形態ですら、私にとつては、我々ドイツ人にとつては、人生を生き抜く上にどれほどの力を貸してくれるものか、どうも判然としない拵えものです。……我が国民は厳格な禁欲主義の学校を、一度も、いかなる形においても卒業しなかった。このことが他方では、我が国民の（また私自身の）あらゆるいやなところを生み出す源になっています」（引用はMommesen, 83–84. 翻訳はKalbergによる）。

(36) Kalberg, 1991, 40; 2002, xxi–xlii.

(37) これがロナルド・レーガンの《悪の帝国》の悪であり、最近では《悪の枢軸》のそれである。